

ああ東京海上ビル解体

— グローバリズムへの懸念 —

お茶の水女子大学 名誉教授
田中 辰明

東京海上ビル(現在は東京海上日動火災保険ビル)は前川國男¹⁾設計の唯一の超高層建築である(写真1)。1974年に完成し、高さ99.7m、25階建てで、赤茶色のタイルが張られた格子状の外壁が特徴である(写真2)。一般の超高層ビルに見られる金属パネルもしくは全面ガラスとは全く異なる味わいを醸し出している(写真3)。現在は東京海上日動やそのグループ企業が入居しているが、取り壊し、隣接する新館と一体化での建て替えが決定した。

このビルの設備設計は筆者の恩師である井上宇市が行った。それだけでも同ビルの解体は非常に残念なこと



写真2 赤茶色のタイルが張られた格子状の外壁を特徴とする東京海上ビル



写真1 丸の内にありながら広場に緑を配置した東京海上ビル

である。井上は我々に「前川の東京海上ビルは梁や柱を外壁のガラスの前に出すことにより、日射を遮り空調の負荷を大幅に減少させている優れた建築である」と語った。さらに「欧州の建築は日射の負荷削減のためにブラインドをガラス窓の外側につけるが、日本では突然台風がやってきたりし、それは危険だ。前川の解決策は非常に優れている」とも語った。

丸の内地区の容積率の変更が建物の解体と新しいビル建設の要因である。現在流行中の新型コロナウイルス感染症も人と人の接触が感染拡大の原因となっている。ただでさえ、人口が集中している東京を経済効率だけを考慮して更に高密度にしてよいものであろうか？首都機能の地方分散が急務である。容積率の緩和は愚行であると考え。容積率の緩和は現在日本がまだ進めているグローバリズムが行き着いたものである。グローバリズムは99%の人の財産を1%の人間に集中させるシステムである。

このビルは1974年竣工であるから竣工後2021年現在、47年しかたっていない。国連の気候変動に関する政府間パネル(IPCC)が地球温暖化の科学的根拠を示した。世界の人々の暮らしを少しでも脅かさぬように、温室効果ガスの削減を着実に実現しなければいけない。



写真3 金属パネルも全面ガラスも使用されていない東京海上ビル

47年しか使用しなかったビルを解体し、新築するのは明らかに温室効果ガス削減の国民をあげての努力に逆行するものである。SDGsなどを一生懸命にやっている人たちの努力を一笑に付すものである。

さて東京海上ビルの文化的、芸術的価値については多く語られているであろう。重複は避けたい。同ビルは、建築基準法による31mの絶対高さ制限が容積規制へと移行し、超高層建築が可能になった時に建てられたものである。将来の都市空間のあり方を模索し、建築を高層化することで、太陽の光が差し込む広場を確保することを可能にした。豊かで人間にやさしい空間を都市に作ろうとしたものである。まさにブルーノ・タウトがベルリンにジードルングを作った時の思想と一致している。

このような子孫に伝えるべき誇るべき文化財であるすぐれた建築を解体してしまうとは何とも残念である。経済行為が文化に優先する国の将来は明るくない。我が国でもブルーノ・タウトと親交があった吉田鐵郎が設計したモダニズム建築東京中央郵便局が取り壊されようとした時があった。ブルーノ・タウトも絶賛した名建築であ



写真4 東京中央郵便局(吉田鐵郎設計)。2009年取り壊されかけたが、当時の総務大臣鳩山邦夫の努力によりファサードは残った。

る。だが2009年(平成21年)、超高層建築物「JPタワー」の工事は進行しており、これを中止すれば大変な金額的損害が発生する。ところがそこで日本郵政を監督する立場にある鳩山邦夫総務大臣が取り壊しにストップをかけた。「トキを焼き鳥にせず、はく製にして保存しよう!」。当時は自由民主党にも経済より文化を尊重する優れた議員がいた。おかげで東京中央郵便局はファサードだけは残り、現在も丸の内地区の大切な顔となっている(写真4)。損害保険会社の監督官庁は金融庁である。金融庁長官には鳩山邦夫のような文化を大切にする気配は見受けられない。鳩山の精神は現在の政権与党には引き継がれなかった。彼は草葉の陰で怒っているであろう。

第二次世界大戦で我が国とともに敗戦したドイツは首都への一極集中は避けている。ベルリンは首都であるので、連邦議会がある。我が国の日銀に相当する中央銀行はフランクフルト・アム・マインにある。また最高裁判所はカールス・ルーエにある。

我が国では首都機能を分散すれば効率が悪くなるという意見がある。ではドイツは効率が悪い国であろうか?むしろ効率の良い国と考えるのが妥当でないだろうか?そのドイツで商業建築としては建て替えた方が効率よく使用できる建物で文化財的価値を認め、現在も使用しているものが沢山ある。そのいくつかを紹介したい。

1. AEGタービン工場 (写真5)

AEG社はドイツを代表する電気メーカーであった。ラテナウ親子が社長を務めた。ラテナウは芸術の造詣が深く、当時ダルムシュタットの芸術家村に建設した自邸などで、有名になっていたペーター・ペーレンスをAEG社に招いた。ペーレンスは同社のいくつもの工場の他、同社が製造する扇風機、伝統器具のデザインも行った。

代表作であるタービン工場は鉄骨が明瞭に露出されている。側面では壁の代わりに、巧みに区画された大きな板ガラスが用いられている。一方で、この建物の重量感、強さを強調するように、隅角部には石材が使用されている。ペーレンスは巨匠であり、氏のアトリエには、グロピウス、ミース・ファン・デル・ローエ、さらに前川国男が師事したル・コルビジエも在籍していた。

建設年 1909

設計者 ペーター・ペーレンス(Peter Behrens)

所在地 Moabit, Huttenstraße, Berlichingenstraße, Berlin



写真5 AEGタービン工場

2. 公営放送局 (写真6)

ラジオ放送が実用化された時のベルリンの放送局ビルである。それまでメガフォンで政策を訴えていたヒトラーもここから全国放送を行い、1933年に政権を獲得した。設計者のペルチッチはイスタンブールの芸術アカデミーから教授として1936年に招聘されたが、赴任前に急逝した。代わってナチス政権を逃れ日本に滞在中のブルーノ・タウトがトルコに呼ばれた。



写真6 ベルリン放送局

建設年 1931

設計者 ハンス・ペルチッチ(Hans Pölzig)

所在地 Charlottenburg, Masurenallee 8-14, Berlin

3. WOGA複合建築 (写真7)

住宅供給会社“WOGA”(WohnhausgrundstücksverwaltungAG)が建設した複合建築で、事務所、ホテル、キャバレー、映画館、商店、集合住宅が含まれる。さらにテニスコートも併せ持つ。20世紀を代表する建築物の一つである。ベルリンで最も賑やかな大通りクアヒュルステンダムの西のはずれにある。

建設年 1927-1931

設計者 エーリッヒ・メンデルゾーン(Erich Mendelsohn)

所在地 Kurfürstendamm 153-163



写真7 複合建築

4. シェルハウス(ガス会社ビルを経て国防省ビル) (写真8)

ヴァイマル共和国時代の代表的建築物である。ベルリンに建設された最初の鉄骨造建築である。波を打った外装が道路を隔てた運河に映える。この材料はオートク



写真8 シェルハウス(現在はドイツ国防省の一部機関が使用)

レイブ養生された軽量コンクリート(ALC)である。建築様式としては第一次世界大戦後流行したノイエ・ザハリッヒカイト(Neue Sachlichkeit), 新即物主義である。

一旦ベルリン市のガス会社の所有になったが、現在はボンから移転してきたドイツ国防省の一部機関が使用している。²⁾

建設年 1931-32

設計者 エミール・ファレンカンブ(Emil Fahrenkamp)

所在地 Reichpietschufer 60,62

5. ホテル、ツーム・リーゼン (写真9)

マイン河の畔、ミルテンベルク(Miltenberg)に建つ現在も営業中のドイツ最古のホテルである。16の部屋が客室として営業に供されているが、客室それぞれ形態が異なる。同じ形態であればルームサービスが行いやすい。経営者は不便さを承知のうえで、過去の遺産を大切にしている。筆者も何回か宿泊したことがある。宿泊者も少々不便さを承知で、過去にこのホテルに宿泊した有名人の事などを偲び、楽しみつつ過ごしている。

建設年 16世紀

設計者 不明

所在地 Hauptstraße 97, 63897 Miltenberg



写真9 ホテル、ツーム・リーゼン

以上ドイツの例を紹介したが、経済が優先するように見える米国でも文化は大切にされている。超高層ビルが林立するニューヨークのマッドマン地区にエンパイアステートビル初め超高層ビルが建設されたのは第一次世界大戦後の1930年代である。当時のビルが現在でも取り壊されることなく使用されている。

追記：筆者は30年以上東京のあるゴルフ倶楽部の会員である。入会動機の一つはクラブハウスが気に入ったからである。クラブハウス設計は佐藤武夫であった。しかし入会するや、このクラブハウス建て替えの話が持ち上がった。風呂の使い勝手がよくないというのが主な理由で知らない間に某ゼネコンの新クラブハウス設計図まで持ち込まれた。まともに建て替えに反対する運動を起こすと、和を尊しとするクラブライフに水を差すことになる。そこでプレーは一人で行き、同伴するプレーヤーにクラブハウスの文化的意義をお話した。「この建物は早稲田大学の大隈講堂の建築音響設計者であった佐藤武夫の作品である。大隈講堂はマイクロフォンがない時代に演台から肉声で話すと講堂内の隅々まで声が届くように設計されていた。このクラブハウスは逆に、食堂で隣の席の会話が聞こえないように設計されている。クラブハウスができたころ、ここで談合を含む大型商談が行われていた。現在あるプロ室の建物は当時会社役員の運転手控室であった。・・・」など。そしてクラブハウスをバックに同伴プレーヤーと記念写真を撮影した。同伴プレーヤーは感心してくれ、また別なプレーヤーに伝えてくれ、ここの会員は文化的価値のあるクラブハウスを使用しているのだという空気が、自然と生まれてきた。もちろんキャディーも他のプレーヤーに伝えてくれた。そしてクラブハウス取り壊し説は自然消滅した。

註

1. 前川國男(まえかわ・くにお)1905年新潟市生まれ、東京帝国大学建築学科を卒業し、渡仏。ル・コルビジエのアトリエで学ぶ。世界文化遺産となったコルビジエの国立西洋美術館(東京都上野)建設の実務を担当した。代表作に東京文化会館、神奈川県立図書館、音楽堂、紀伊国屋ビル、京都会館などがある。
2. 1990年東西ドイツは旧西ドイツが旧東ドイツを吸収する形で併合された。併合前、旧西ドイツの首都はボンであった。併合後、多くの省庁は新しい首都となったベルリンに移動した。しかし防衛省はベルリンはロシアにより近いことで、ロシアを刺激するという理由で、ボンに残った。その後ドイツとロシアの関係は比較的うまく推移し、ロシア側も容認する形で、防衛省の一部機能が首都ベルリンに移りつつある。